

令和紙



おりおりの記

ニューヨークの思い出

JPX総研
代表取締役社長

宮原 幸一郎

1990年代中頃に、ニューヨーク郊外に3年ほど駐在する機会があった。

アメリカについては日本でも情報が溢れ、出張で訪れる機会もあり、赴任前はかなり分かっているつもりでいたが、実際に暮らし始めてみると、多くのカルチャーショックを経験した。その中でも特に印象に残っているのが、子供たちの学校での授業である。

長男は現地校の小学3年、次男は小学1年のクラスに編入した。次男の最初の宿題はコインの種類を覚えることだった（そのための、コインの絵が描かれたテキストがあった）。授業では「あなたは今日お弁当を忘れました。さて、どうしますか」と考えさせ、次男によれば「今日のランチは我慢する」「友達や先生のお弁当を分けてもらう」「家に連絡をして届けてもらう」等様々な答えがあり、先生は「みんな正解」と言ったそうだ。次男の担任と話す機会に尋ねると「どちらも暮らしの中でとても大切なことだから」との答えだった。

また、子供たちが順番に自宅から持参した自分の宝物についてクラスメート皆の前で説明をし、その後、先生や友達からの質問に答える「show and tell」という授業があった。アメリカ人は、こうして幼少の頃から、自分の考えを大勢の前で伝え、人の話を聴くプレゼン能力を鍛えられていることを実感した。

長男のある日のテストでは「アメリカ大陸は

1492年にヨーロッパから来たコロンブスによって発見されたと言われているが、もしアジアの人によって発見されていたら、その後のアメリカの歴史は

どうなっていると思うか」という、やはり特定の正解がない問題があった。個人面談の席で担任に「日本のテストでは『1492年』や『コロンブス』が問題になるが」と尋ねると、「いつか、とか、誰が、というのは調べる手段が分かっている」とのことであった。プレゼンの授業はディベートへと発展。例えば「野球vsサッカー」の論戦は本人の希望とは関係なくチーム分けがされ、徹底的に議論をし、相手のチームを言い負かす。終わればお互い感情的なしこりを残さない、日々こうした訓練が楽しく続く。

これらは30年近く前の記憶であるが、アメリカにおけるこのような、自分の考えを臆せず人前で話す練習や、特定の正解がない問題について一人一人に自由に考えさせ、考え方の違いがあることを知る教育は、私にとっては今でも大変印象深い思い出となっている。

